

*** 昭和24年11月23日発行アサヒグラフ記事**

2009年12月のアーカイブスシンポジウムに参加された「渋谷星の会」の小川氏から昭和24年11月23日発行のアサヒグラフの東京天文台の記事を見せてもらった。今、昭和84年12月、60年前の東京天文台の様子を見るのもいいではないか。写真1～2が当時の東京天文台のパノラマ写真である。

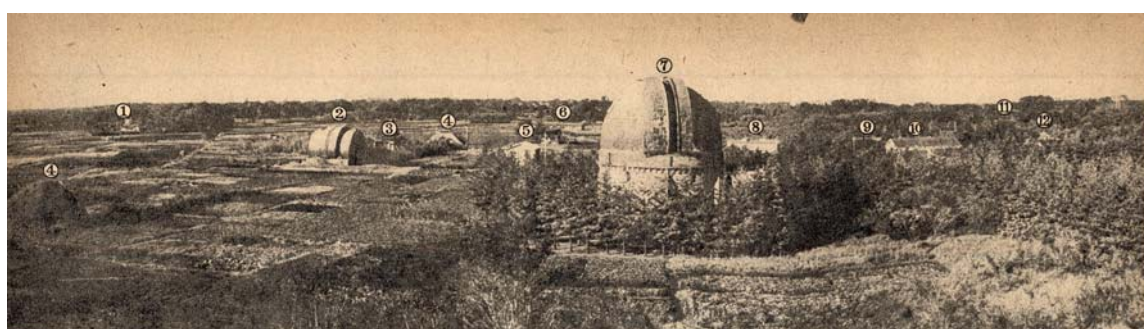


写真1



写真2

この写真の番号に施設の名前が入れてある。①無線報時受診所、②子午環、③研究室、④子午線標、⑤地震研究所支所、⑥地理調査所測量基線、⑦26吋望遠鏡ドーム、⑧図書館、⑨工場、⑩研究室、⑪台長官舎、⑫車庫、⑬研究室、⑭太陽レーダー、⑮太陽分光写真儀室、⑯天体写真儀室とある。③の研究室は子午線研究部の辻研と呼ばれたものであり、⑩の研究室は天文時部、⑬の研究室は本館(二)と呼ばれた分光部の建物、⑭の太陽レーダーと書かれたものは畑中武夫先生たちの太陽電波望遠鏡である。⑮の太陽分光写真儀室が「オバケ」と呼ばれた建物、⑯の天体写真儀室がブラッシャー望遠鏡ドームである。そして⑮の建物の下の建物には番号がないが、これが「3号研究室」と呼ばれていた太陽グループの研究室であった。これらの写真は塔望遠鏡のベランダから撮影されたようで塔望遠鏡の建物が写っていない。26吋望遠鏡ドーム周辺の木々もまだ小さく、その西の子午環周辺

は一面の畑であった様子が分かる。⑥の地理調査所測量基線と書かれたものは、基線尺試験室の建物であり、測量基線そのものではない。基線尺試験室は間口 3m、奥行き 40m という大きな建物であったが、忽然と姿を消し、今は基礎が残るばかりである。また⑤の地震研究所支所は現在の開発実験棟西側にあつて、脇に高い巨大な「モミ」の木が立っており、そのてっぺんで「カッコウ」が鳴いていたことが思い出される。写真 3 はパノラマ写真に写っていなかった塔望遠鏡が写った農作業をする畑の写真がある。



写真 3



写真 4

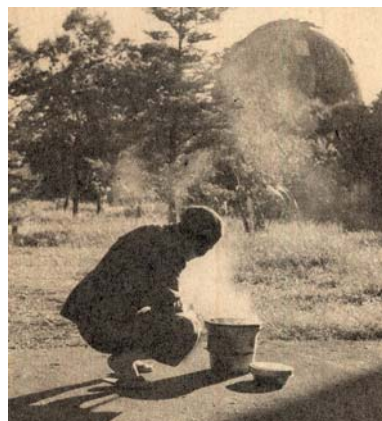


写真 5

写真 4 は天文計算室で計算している様子が写っている。手前の人が使っている計算機は電動計算機のような。そしてその向こうには手回し計算機が見える。また写真 5 は自炊をする独身者とあるが、官舎の庭とは思えないところで七輪の煙がたなびいている。昭和 24 年頃といえば、まだ戦後に建った官舎のない頃だから合宿と呼ばれた独身寮の観測者であろう。

写真 6 は天体写真儀室のブラッシャー望遠鏡である。一つの赤道儀の何本もの望遠鏡を

同架している、この望遠鏡で十数個の小惑星を発見したとある。写真7はゴーチェ子午環で観測している様子である。目盛環には眼視のマイクロメーターが着いており、写真で目盛りを撮影する以前であったことが分かる。

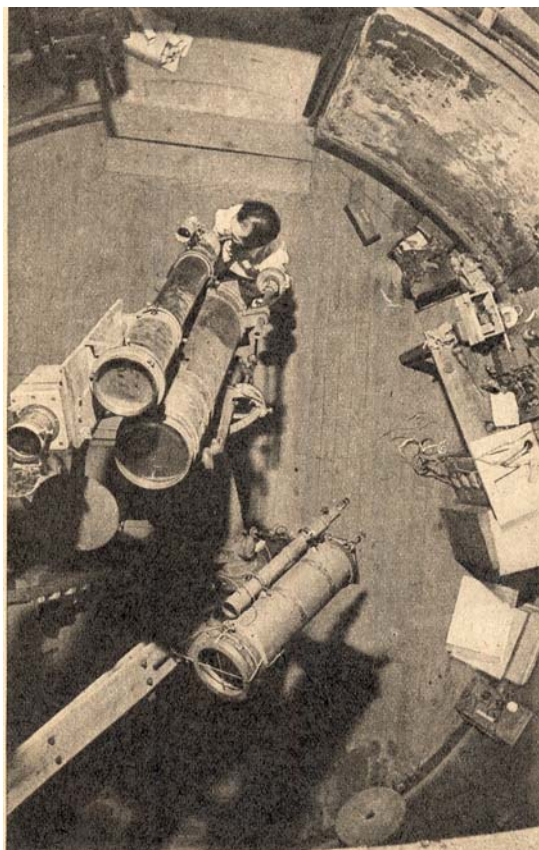


写真6 ブラッシャー望遠鏡

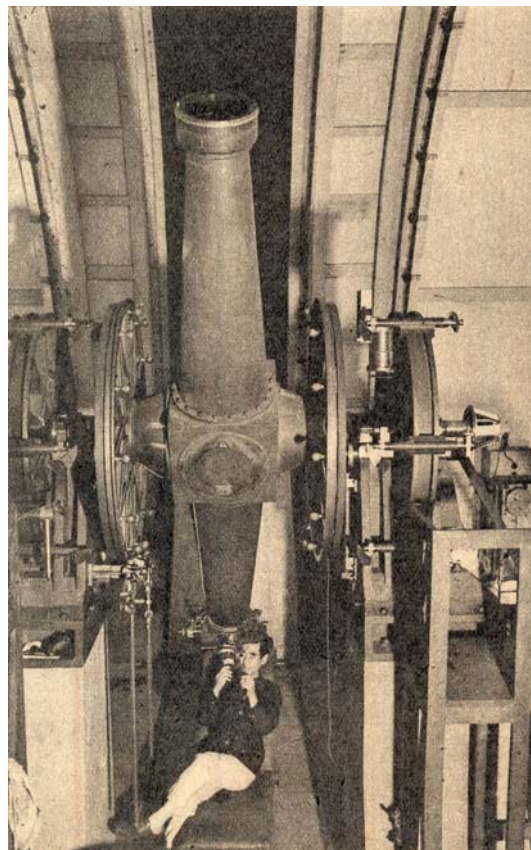


写真7 ゴーチェ子午環

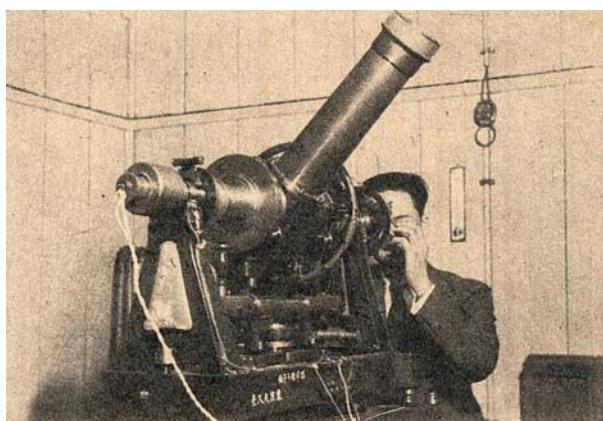


写真8 90mm バンベルヒ子午儀

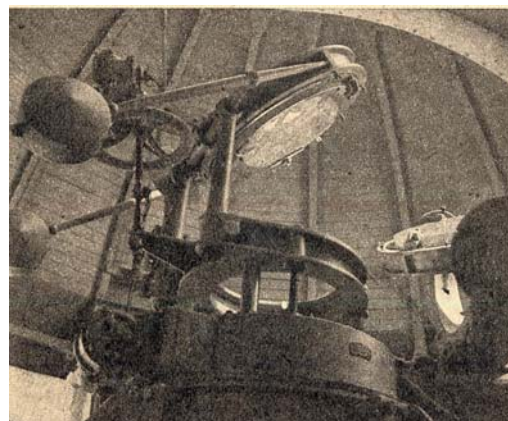


写真9 塔望遠鏡シーロスタット

写真8は昭和24年頃には日本の時刻を決定していた1号90mmバンベルヒ子午儀である。写真9は、塔望遠鏡のシーロスタットである。写真10は26吋望遠鏡の案内望遠鏡を覗く子供姿が写っている。この望遠鏡にもたくさんの小望遠鏡が同架されている。主望遠鏡の焦点部にはツアイス製の1代目のカメラが取り付けられている。

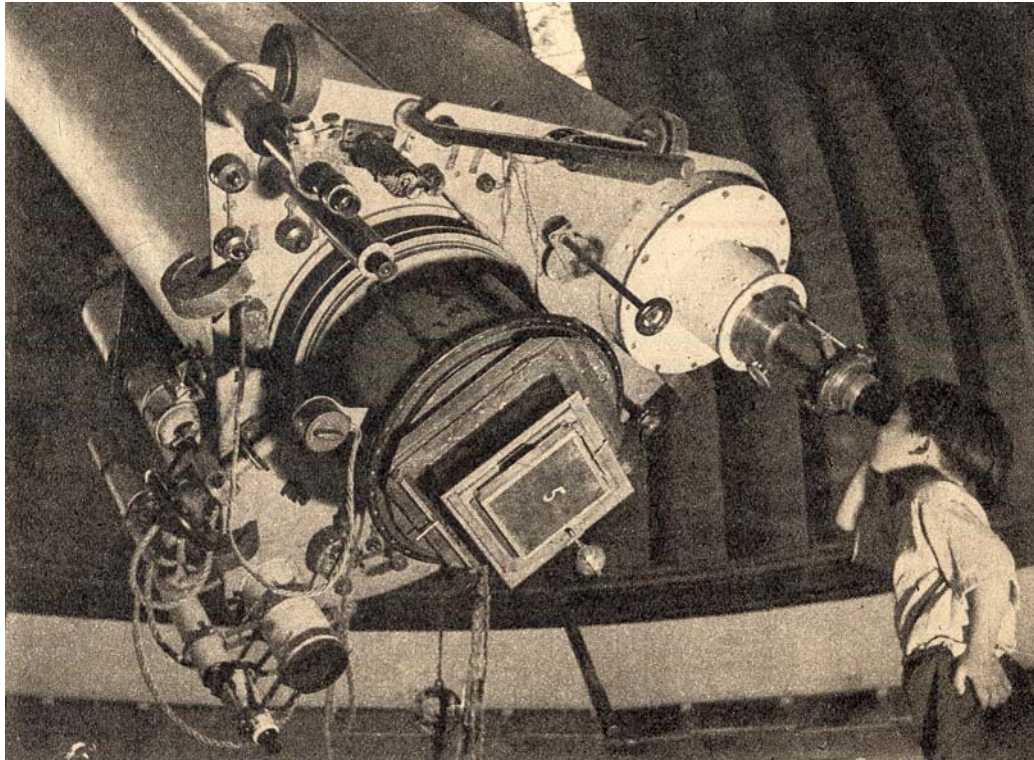


写真 10 26 吋 (65cm) 望遠鏡の焦点部

写真 11 は、200MHz 帯の太陽電波望遠鏡の在りし日の姿である。この日本の初期の電波望遠鏡は現在、野辺山宇宙電波観測所に復元展示されている。

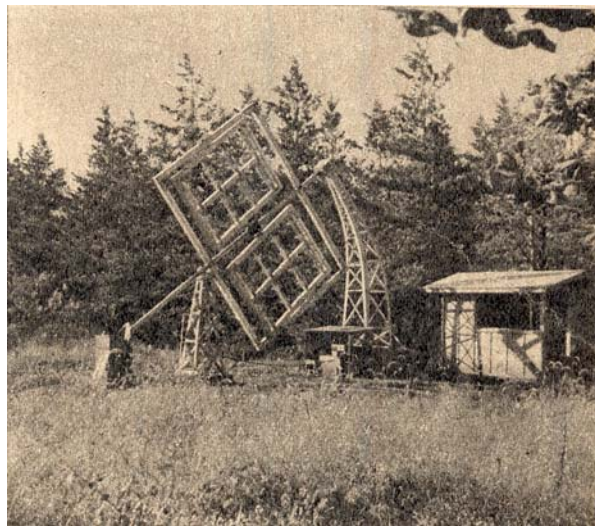


写真 11 200MHz 帯太陽電波望遠鏡

以上の写真は、このアサヒグラフに掲載された主な写真である。これらの写真に写っている望遠鏡は全て現在では使用されていないか、姿を消している。時は流れ、科学の進歩の激しい一面を見る思いである。